

FD NEWS



No. 33 2012年3月24日
摂南大学 FD委員会

〒572-8508 寝屋川市池田中町 17-8
TEL: 072-839-9106
E-mail: kyomu@ofc.setsunan.ac.jp

Smart and Human

常翔学園

摂南大学

シラバス騒ぎ

副学長 八木紀一郎

20年ぐらい前から教育改革の波が日本の大学にもおしよせ、シラバス、授業評価、FDが大学教育改革の「3種の神器」といわれた。そのなかでも、シラバスが一番先行したのではないだろうか。

経済学史を専門としていた私は、大学史も隣接分野として興味があった。それで、前任校にいた時に予算をもらってシラバスの研究をしたことがある。欧州の大学、とくにドイツの大学ではシラバスなどはないと断言される先生がおられたので、マックス・ウェーバーの経済学の授業のシラバスをお見せした。といっても、タイトルが「授業要綱 Grundriss」なので、これはシラバスではないと言い張ることもできた。

アメリカの大学のシラバス・コレクションを買いこんだこともある。経済学の授業だけでも、科目が沢山あるので20冊近くになっていた。オーソドックスな授業もあれば、異端的な授業もあって結構面白かった。それぞれのクラスごとに、トピックと参照文献(参照ページまで入っている)が並べてあるのを見ていくと、教室にいるような気分になる。数年たってまた調べてみると、そのコレクションの新版が出ていて、比較してみると、新しい授業科目が生まれたり、参照文献が入れ替わったりしていた。これを材料に経済学の現状が展望できるな、とも考えたが生憎それほど暇ではなかった。

シラバスが導入される段になると、教員のなかからシラバスは企業秘密だから公開できないとか、著作権を保障してくれるのかと言って公開を渋る声が出てきた。大学院までシラバスが要るということになったからだ。しかし、新分野であっても、学問の発展には、標準と考えられるものを公開して普及させる方が有益だろう。現在では、シラバスどころか授業までも無償で公開して行きわたらせることを戦略にする大学も出てきている。

残念なことに、日本ではシラバスが授業内容の規格化を促進するものになってしまった。新しい標準を作るための競争があってもよい。外目に合わせる必要も否定しないが、本当は創造的なシラバス、創造的な授業で競争したい。

2011 年度後期「学生による授業アンケート」実施結果の報告

FD委員会（SG1）

I 実施状況

2011 年度後期の「学生による授業アンケート」は11月28日（月）から12月10日（土）の2週間にわたって実施された。今回のアンケートでは全学FD委員会の承認のもと、経営学部と法学部において記名式アンケートが試験的に導入された。記名式アンケートの導入は、全学部・学科が横並びにならび互いに授業評価を比較しながら自学部・学科の授業改善に取り組むというメリットを半減させるが、学生が主体的に授業に参加し授業の質を教員とともに向上させていく責任の一端を担っているという考えのもとに行われた。

実施対象科目はこれまでと同様に、ゼミ・実験・演習および履修者数が10名以下の科目を除く全授業科目であった。回収は、学部・学科の判断に従い、教員ないし学生が担当した。記名式アンケートを導入した2学部についても同様である。また、アンケート結果の全体的な集計と分析法は過去との整合性を考慮し、これまでと同じ方法で行った。ただし、2学部については、昨年後期の無記名式アンケートと今回の記名式アンケートの比較、さらに、前期と後期の比較検討を別途に行った。それらは<IV>で紹介する。

集計結果の報告と公開は、昨年度と同様に、①各授業担当者への結果報告、②各学部・学科への結果報告、③FDニュース等による学内での結果報告、④公開希望科目については摂南大学ホームページにて学内に限り期限付きで公開を行うこととした。また、学生が自由記述欄に寄せたコメントと教員による回答は、学部・学科ごとの“取り扱い方法”に従って整理され、教員各位にメールや文書によって配信されることになっている。

なお、以下に報告される集計結果について、<II アンケート結果の概要>では、学部・学科の開講する科目群でまとめられ、複数学部にまたがる授業科目のデータは除外されている。また、<III アンケート結果の分析>では、教員が特定されないことを配慮し、従来のカテゴリー区分の一部を変更した。最後に、<IV 記名式アンケート実施結果>では、2学部で行われた記名式アンケートの結果に関する分析が質問項目ごとに報告されている。

II アンケート結果の概要

9項目について、質問ごとに集計結果を示す。文中の相関係数はすべてピアソン式である。

なお、学部・学科の日本語名とアルファベットは次のように対応する。

C 都市環境工学科	A 建築学科	E 電気電子工学科	M 機械工学科
B マネジメントシステム工学科	V 生命科学科	R 住環境デザイン学科	
L 外国語学部	I 経営学部	Y 薬学部	J 法学部 W 経済学部

(1) 質問1:「この授業にどの程度出席しましたか。」

アンケートに回答した学生のうち、100%出席したと回答した学生と80~100%出席した学生数の割合は、

それぞれ54.0%と34.7%であった。80%以上出席したと回答した学生の割合は全学生の88.7%であった。アンケートの実施日が講義回数の10回～11回目に当たることを考慮すると、授業に欠かさず出席する傾向を持つ学生と、欠席しがちな学生がはっきりしてきたと思われる。さらに各学部・学科により科目内容の特徴があるため、一概には言えないが、12学部・学科中7学部・学科が80%以上出席した学生数が90%を超えており、学生が授業に出席する傾向は定着していると思われる。前期に比べると幾分下降気味である。

表2-1 出席状況

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
100%	2081	873	1237	1981	202	757	405	2123	2193	2953	1450	1487	17742
80～100%未満	598	480	582	631	151	381	345	2229	2213	1018	1470	1306	11404
60～80%未満	105	104	123	150	20	17	92	729	504	322	450	384	3000
40～60%未満	6	9	13	13	12	1	12	85	106	62	113	52	484
40%未満	9	5	17	11	2	0	9	49	30	37	34	32	235
平均	4.69	4.50	4.53	4.64	4.39	4.64	4.30	4.21	4.27	4.55	4.19	4.28	4.40

(2) 質問2: 「この授業に意欲的に取り組みましたか。」

全学部・学科の平均値は3.91で、「そう思う」と「強くそう思う」を加えた学生数の割合が高い。平均値が4.00を超えている学部・学科が2つあるが、概ね全体平均値の周りに分布している。前期と比較しても、各学部・学科ごとの平均値はほぼ同様の傾向である。質問1によると80%以上出席したと回答した学生が89%弱であったのに比して、質問2で「そう思う」および「強くそう思う」と回答した学生は70.1%に留まっている。また「そう思う」と「強くそう思う」と回答した学生の割合はそれぞれ42.0%と28.1%であった。質問1と質問2の間のピアソンの相関係数が0.38であることから、出席しているから学生が授業に意欲的であるとは言い切れない。

表2-2 取り組み状況

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	1381	404	431	687	111	285	191	1766	1401	1195	745	615	9212
そう思う	897	629	786	1093	163	454	335	2315	2392	1703	1692	1301	13760
どちらともいえない	409	360	605	817	88	335	284	904	971	1168	887	1013	7841
あまりそう思わない	51	56	105	129	16	67	39	146	226	234	148	236	1453
全くそう思わない	50	23	42	57	6	12	13	68	41	86	31	88	514
平均	4.26	3.91	3.74	3.80	3.93	3.81	3.76	4.07	3.97	3.84	3.85	3.65	3.91

(3) 質問3: 「この授業の事前・事後学習課題をしましたか。」

この質問に関しては、全学部・学科の平均値が3.14と低い値を示しており、学生は授業の事前・事後学習を時々しかしていないと考えられるが、昨年・一昨年・前期より平均値は上昇している。質問2と質問3の間のピアソンの相関係数は0.50で、ある程度の相関関係が見て取れる。事前・事後学習課題を学生に課するという授業形態をとっているかどうかは、はっきりしないため推量するしかないが、授業で理解できなかったことを自主的に復習しているとも考えられる。各学部・学科でばらつきが大きいのは、学部・学科間の教科の特質や教員の取り組みを反映したものではないかと考えられる。

表2-3 事前・事後学習課題

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
大変よくした	860	267	229	329	62	131	111	1134	628	577	295	343	4966
よくした	760	359	528	477	64	256	187	1493	1071	811	657	730	7393
時々した	831	578	796	939	125	453	348	1585	1675	1598	1321	1259	11508
あまりしなかった	183	155	259	528	77	218	126	588	1004	794	742	564	5238
まったくしなかった	164	111	155	505	59	98	85	403	657	601	490	358	3686
平均	3.70	3.35	3.21	2.85	2.98	3.09	3.13	3.45	3.00	2.99	2.86	3.04	3.14

(4) 質問4:「この授業の到達目標を達成できましたか。」

全学部・学科の平均値は3.63で、昨年・一昨年・前期より高い数値となっている。授業の最初にその授業の到達目標が説明されるようになったことが一因と考えられる。「どちらともいえない」と回答している割合が38%程度もあるため、学生に到達目標を認知させる授業の工夫がもとめられよう。一般に教育を受ける前に到達目標をイメージさせることは難しいとも考えられる。また、学部・学科間の差異もそれほど大きくないことから文科系と理工系の区別はないようである。

表2-4 到達目標

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	917	271	264	428	79	180	113	1424	888	827	493	375	6259
そう思う	931	434	606	826	133	385	280	2011	1986	1374	1412	1019	11397
どちらともいえない	772	630	875	1181	140	497	384	1462	1786	1859	1378	1541	12505
あまりそう思わない	94	91	147	235	24	75	50	216	305	229	171	218	1855
全くそう思わない	77	44	74	107	9	18	31	89	59	93	51	101	753
平均	3.90	3.54	3.43	3.44	3.65	3.55	3.46	3.86	3.66	3.60	3.61	3.41	3.63

(5) 質問5:「この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか。」

全学部・学科の平均値は3.87で、各学部・学科の平均値は全体の平均値の周辺にばらついている。「そう思う」、「どちらともいえない」と回答した学生の割合は39.3%と29.8%であり、シラバスの内容どおりに授業が進んだかどうか判断できない学生が多いと思われる。しかし、昨年度や前期よりもこころもち上向き、もしくは変わらない平均値であるため、シラバスを読んで授業を選んでいる傾向であると考えられる。シラバスはあくまで授業計画である。毎年学生の学業に取り組む態度が変化し、かつ学部・学科の授業の特質が異なることを考えると、シラバスにとらわれすぎると学生の実態に応じた授業を提供できず、学生にとって有用感が少ない授業となってしまう可能性がある。しかし、どちらともいえないと回答する学生の割合を少なくすることは必要だと思われる。

表2-5 シラバスの内容

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	1175	334	405	521	96	291	147	1889	1354	1190	854	582	8838
そう思う	813	500	752	927	163	480	323	2113	2236	1633	1671	1284	12895
どちらともいえない	685	565	678	1136	109	359	337	1036	1327	1426	901	1210	9769
あまりそう思わない	54	42	59	102	12	20	31	99	106	83	69	117	794
全くそう思わない	67	28	75	97	5	6	22	72	19	54	17	68	530
平均	4.06	3.73	3.69	3.60	3.86	3.89	3.63	4.08	3.95	3.87	3.93	3.67	3.87

(6) 質問6:「この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか。」

全学部・学科の平均値は3.97で、前期より少し上向いている。具体的には「そう思う」および「強くそう思う」を選択した学生は39.4%と32.8%で比較的高く、全体に対する割合は72.2%で、教員が熱意をもって授業に臨んでいたと考えられる。各学部・学科の平均値に少し差があるのは、教員数や授業の規模や授業の性格などが影響していると考えられる。

表2-6 教員の熱意

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	1148	395	466	593	108	361	195	2365	1789	1494	1126	741	10781
そう思う	834	497	702	1005	153	486	303	1970	2285	1682	1657	1356	12930
どちらともいえない	558	458	590	900	93	252	289	670	780	972	615	906	7083
あまりそう思わない	128	67	120	177	21	39	43	132	150	160	85	170	1292
全くそう思わない	127	53	92	113	10	16	32	76	40	77	29	85	750
平均	3.98	3.76	3.68	3.64	3.85	3.99	3.68	4.23	4.12	3.99	4.07	3.77	3.97

(7) 質問7:「この授業の担当教員は、授業内容を理解させるための工夫をしていましたか。」

全学部・学科の平均値は3.87で、前期より少し向上している。この質問について学部・学科の平均値が4.00以上なのは3学部である。質問6と質問7の間のピアソンの相関係数は0.81で、ある程度強い相関関係が見て取れる。学生に熱意を感じさせると授業内容を理解させるための工夫をしていたと映るのであろう。

表2-7 理解させる工夫

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	1123	359	432	519	97	311	184	2274	1592	1454	1051	651	10047
そう思う	786	489	690	953	157	456	275	1913	2205	1571	1624	1236	12375
どちらともいえない	577	469	575	921	100	296	304	754	923	1036	681	1017	7653
あまりそう思わない	117	73	143	211	19	60	59	171	226	199	119	231	1628
全くそう思わない	191	81	128	182	12	33	39	97	77	129	40	123	1132
平均	3.91	3.66	3.59	3.51	3.80	3.82	3.59	4.17	4.00	3.92	4.00	3.63	3.87

(8) 質問8:「この授業の担当教員の話し方は、明瞭でわかりやすかったですか。」

全学部・学科の平均値は3.82で、前期より向上している。各学部・学科の平均値で4.00を越えているのは1学部であった。質問7と質問8の間のピアソンの相関係数は0.85で、強い相関関係が見て取れる。教員の話し方が授業内容を理解させるための工夫をしていたと映るのであろう。

表2-8 教員の話し方

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	1047	341	396	512	114	329	175	2272	1610	1450	1064	660	9970
そう思う	794	509	648	858	139	401	283	1846	2059	1420	1522	1182	11661
どちらともいえない	592	442	613	945	104	295	306	762	960	1053	735	1008	7815
あまりそう思わない	138	92	165	263	16	91	48	199	313	296	144	265	2030
全くそう思わない	223	86	142	207	12	40	49	132	104	166	51	141	1353
平均	3.82	3.63	3.50	3.43	3.85	3.77	3.57	4.14	3.94	3.84	3.97	3.60	3.82

(9) 質問9: 「総合的に考えて、この授業を受講してよかったですか。」

全学部・学科の平均値は3.87であり、各学部・学科の平均値で4.00以上だったのは3学科であった。質問9と質問8、質問7の間のピアソンの相関係数はそれぞれ0.82、0.80で、強い相関関係が見て取れる。同じく質問9と質問6の間のピアソンの相関係数は0.75で、ある程度強い相関関係が見て取れる。さらに質問9と質問5、質問4、質問2の間のピアソンの相関係数はそれぞれ0.64、0.61、0.58で、ある程度の相関が見て取れる。質問6から8までの回答結果はほぼ一致した傾向を示している。これは総合満足度を高めるための因子を検討するために重要なデータであろう。授業で総合満足度を高めるには、学生が参加できる授業形態、少人数教育を進めることが有効と考えられるが、授業実践の中での一層の検証作業が必要であろう。

表2-9 総合満足度

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強く思う	1088	365	424	568	114	318	182	2286	1727	1511	1113	684	10380
そう思う	788	473	611	837	143	418	299	1827	2111	1439	1488	1167	11601
どちらともいえない	627	497	667	1010	103	312	295	804	936	1108	764	1031	8154
あまりそう思わない	107	67	132	194	16	72	53	169	208	190	90	215	1513
全くそう思わない	178	66	125	163	7	34	31	122	64	132	55	150	1127
平均	3.90	3.68	3.55	3.52	3.89	3.79	3.64	4.15	4.04	3.91	4.00	3.62	3.87

2002年度以来の「総合満足度」の経年変化をみると(図2-1)、前期・後期とも上昇傾向となっているが、2011年度後期は経営学部および法学部での記名式アンケートの導入の影響もあり前年と比べてやや大きな伸びが見られる。図中、後期の総合満足度が前期より上回っている理由は今後検討すべきであろう。また両曲線は一定の水準(およそ3.8付近)に安定しつつあることより、アンケート調査が授業内容の改善に何らかの効果をもたらしてきたが、その内容を検討すべき転換期にきたと判断して差し支えないであろう。

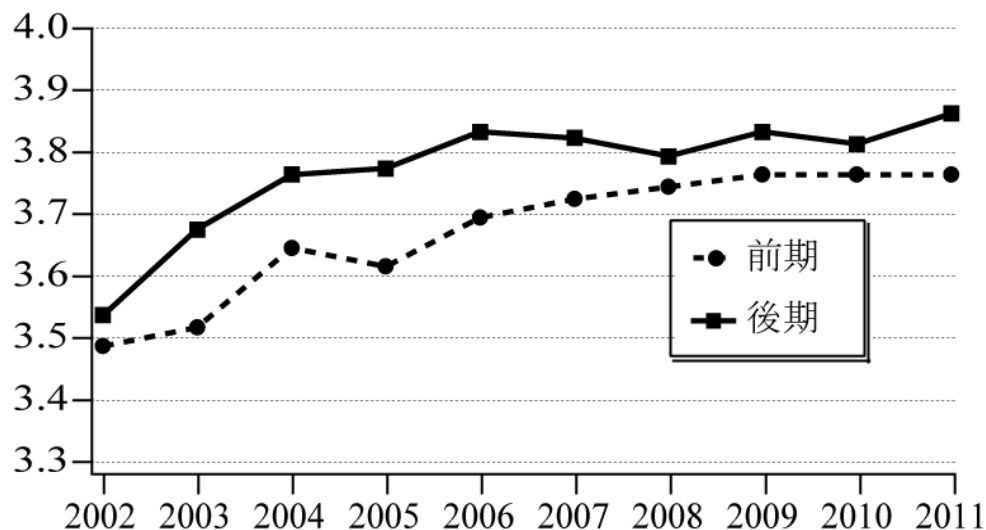


図2-1 総合満足度の経年変化

Ⅲ アンケート結果の分析

学生の授業「満足度」(質問9)の違いを、(1)履修者数による授業規模、(2)担当教員の年齢、(3)担当教員の職階、(4)授業時限、(5)必修・選択の別、(6)科目の分野の別、の6つの観点からみてる。2011年度前期における分析と同様に、各データにおいて学部・学科別の結果は表示せずに、各観点に対する全体の平均を表示している。また、今回の結果と並列して、2011年度前期と2010年度後期のデータも図中の折れ線グラフで表示している。そして最後の(7)に、質問項目間のピアソンの相関係数を表にしたものを掲載した。その表では、今回と前回(2011年度前後期分)のデータを併記している。

(1) 授業規模と満足度(図3-1)

全体の傾向として授業規模が大きくなるにつれて満足度が低くなる印象を受けるが、今回のアンケートでは160人を超えるような大規模授業の満足度が高いという、一見奇異な印象を受ける結果が見られた。これは、160人を超える大規模授業からの回答数の約3分の2を占める経営学部と法学部と薬学部での満足度が押し並べて高かったことや大規模授業のクラス数は相対的に少ないことなどの影響によるものと考えられる。

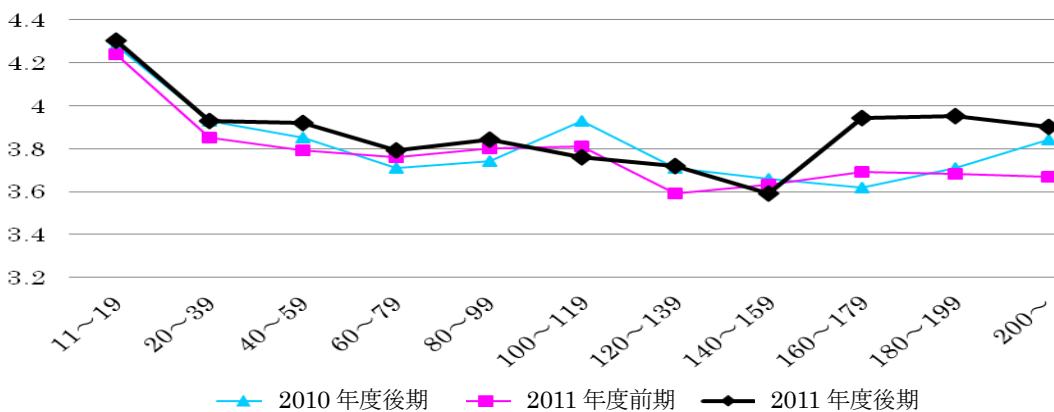


図3-1 授業規模と満足度

(2) 教員の年齢と満足度(図3-2)

全体として、担当教員の年齢が学生の年齢に近い授業の満足度が高いという傾向は感じられる。

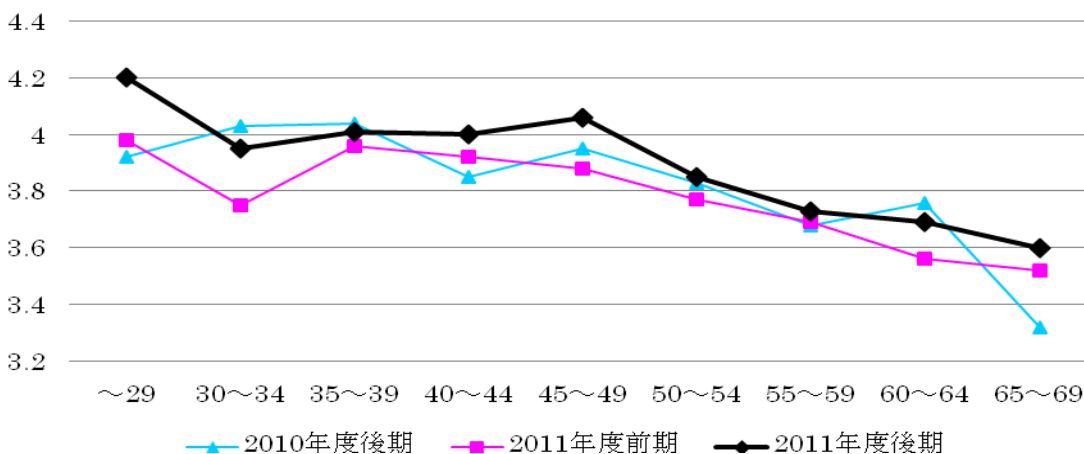


図3-2 年齢と満足度

(3) 教員の職階と満足度 (図 3-3)

このデータでは、助教を専任講師に含めている。専任においては職階が高いほど年齢が高い教員の割合が高くなるであろうことから、(2)と同じような傾向を示すが、その傾向が弱められることは容易に推測できるのではないだろうか。

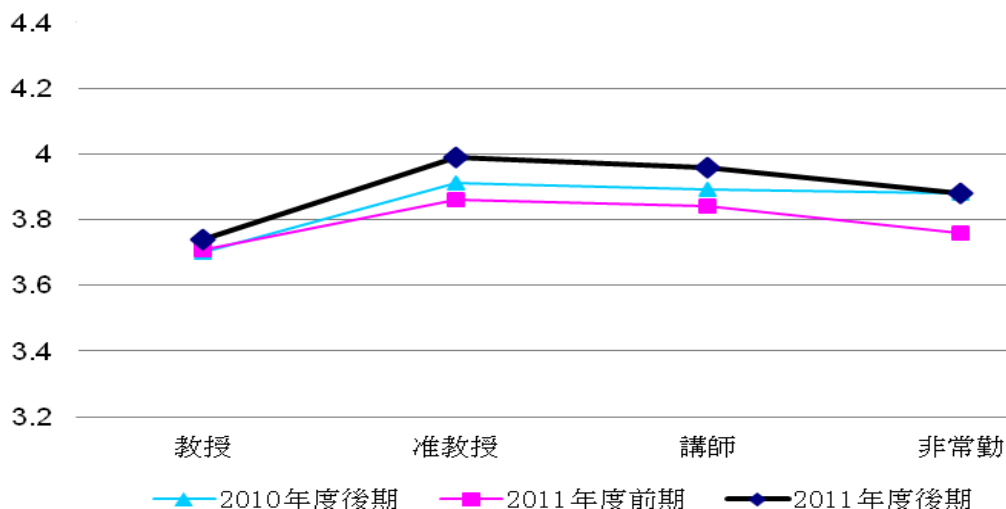


図 3-3 教員の職階と満足度

(4) 授業時限と満足度 (図 3-4)

3回のアンケートのいずれにおいても3時限の授業科目の満足度が最も低かったが、授業時限による満足度の違いはほとんどないと言える。

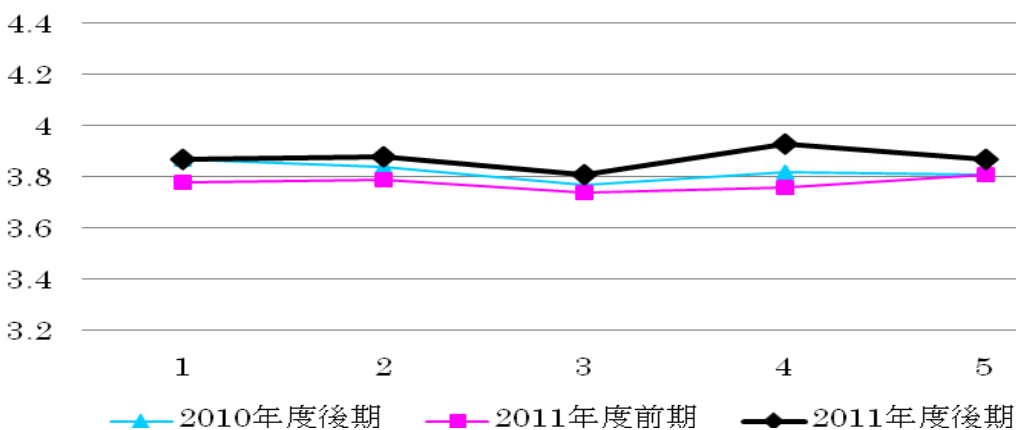


図 3-4 授業時限と満足度

(5) 必修・選択の別と満足度 (図 3-5)

必修科目より選択科目の方の満足度が高い傾向は見られるが、大きな差とは言えないのではないだろうか。

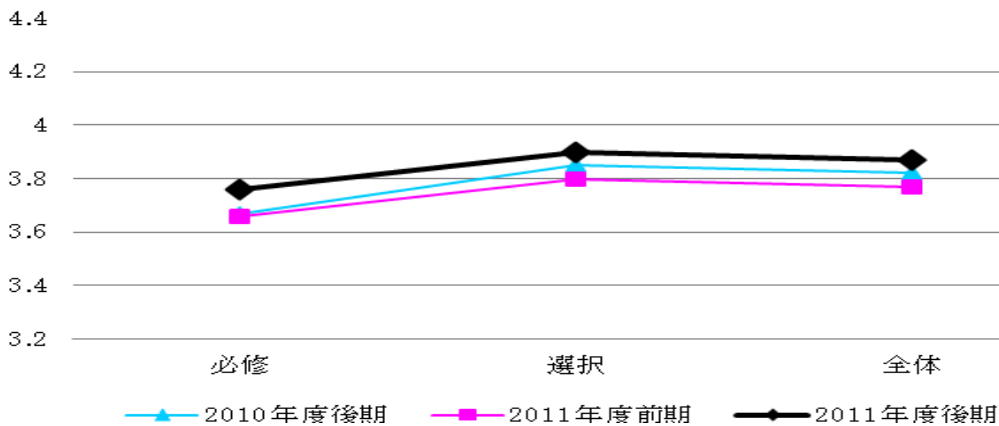


図 3-5 必修・選択の別と満足度

(6) 科目の分野の別と満足度 (図 3-6)

ここでは、キャリア科目と教職科目のデータを表に含めてはいない。2011年度後期と2010年度後期のデータは同じような振る舞いを見せているが、2011年度前期のデータは少し異なっている。全体として、分野の違いによる満足度に大きな差はないと言えるのではないだろうか。

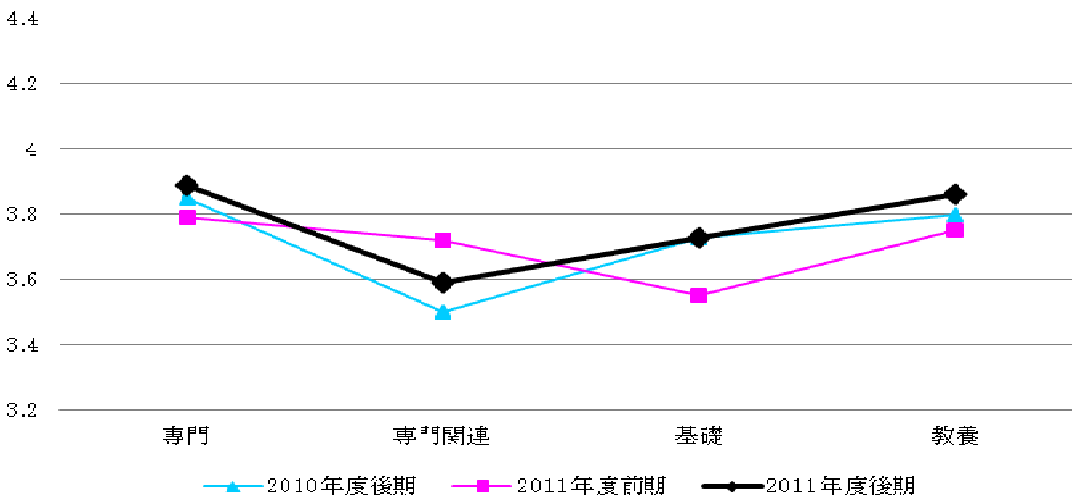


図 3-6 科目分野別と満足度

(7) 質問項目間の相関

表には、上段に今回のアンケート結果による各項目間のピアソンの相関係数の値を、下段の括弧の中に前回(2011年度前期)の結果によるものを記載している。表の上下の数字に大きな違いは全く見られない。参考までに、2010年度後期のアンケートにおける、満足度(質問9)と質問1から質問8までの相関係数を過去のFDニュースの記事から引用すると、順に 0.19、0.60、0.41、0.65、0.66、0.76、0.80、0.82 である。

表 3-1 質問項目間の相関（ピアソンの相関係数）

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9
質問1	1	0.38 (0.38)	0.20 (0.19)	0.23 (0.22)	0.20 (0.19)	0.17 (0.18)	0.15 (0.16)	0.14 (0.14)	0.17 (0.18)
質問2		1	0.50 (0.49)	0.61 (0.59)	0.52 (0.50)	0.51 (0.51)	0.52 (0.51)	0.51 (0.50)	0.58 (0.57)
質問3			1	0.56 (0.55)	0.41 (0.39)	0.35 (0.34)	0.37 (0.36)	0.37 (0.36)	0.39 (0.38)
質問4				1	0.66 (0.65)	0.58 (0.57)	0.59 (0.58)	0.59 (0.58)	0.61 (0.61)
質問5					1	0.69 (0.68)	0.66 (0.65)	0.63 (0.63)	0.64 (0.63)
質問6						1	0.81 (0.81)	0.77 (0.76)	0.75 (0.73)
質問7							1	0.85 (0.84)	0.80 (0.79)
質問8								1	0.82 (0.81)
質問9									1

上段 :2011 年度後期

下段():2011 年度前期

IV 記名式アンケート実施結果

〈経緯〉 これまで実施されてきた授業アンケートはすべて無記名によるアンケートであった。理由は、すべての授業を横断的に捉えて全学的な授業改善の足がかりを得るためである。そして、その成果は経年比較における総合満足度の向上によって知ることができる。教員の授業に対する熱意や工夫が実りつつあることを示している。

しかし、その一方で授業アンケートのマンネリ化による弊害が見られている。たとえば、不適切な記入法や自由記述欄における誹謗中傷や悪ふざけなど学生からの質の低いコメント内容が散見されるようになった。その結果、アンケートに対する信頼性がしばしば問題となってきた。このような負の要素を取り除きアンケートへの信頼感を高める方策はないか、また、教員の授業改善に加えて学生による主体的な授業改善への取り組みを促すことができないかなどがSG1の中で激しく討論された。

FD委員会は、全学的な教育的課題を議論し、各学部の教育目標の相互理解を図りながら授業アンケートの改善策を重ねて検討し、昨年10月、“授業アンケート結果の信頼性を検証し、かつ、授業改善にむけて学生の主体的な関わりを促す”という目的のもとに、従来の無記名による授業アンケートに加えて、記名による授業アンケートを併用することを決定した。あくまで試験的ではあるが、記名式を希望する経営学部と法学部の2学部で後期授業のアンケートが記名によって行われた。

〈結果〉 経営学部と法学部の後期に実施された記名による授業アンケート結果をもとに、昨年度後期に実施された無記名によるアンケート結果との比較、および本年度前期の無記名によるアンケート結果との比較を行った。いずれも2学部について各質問項目（A1~A9）の平均値の差の検定を行った。表中の数値は、各

平均値、その平均値の差（変動差、マイナスは低下）、統計量はT検定の数値で、2～4は有意差があり、5～8で大きな有意差が認められる、8以上はかなり大きな有意差が認められることを意味する。

(1) 2010年度後期と2011年度後期の比較

表 4-1 経営学部の後期授業に関する経年比較

	2011	2010	変動差	統計量
A1	4.275	4.254	0.02068	1.30266
A2	3.971	3.981	-0.0097	0.54661
A3	3.002	3.065	-0.0631	2.50458
A4	3.665	3.731	-0.0662	3.57716
A5	3.952	3.965	-0.0129	0.75535
A6	4.117	4.062	0.05493	3.08105
A7	3.997	3.953	0.04451	2.29608
A8	3.943	3.893	0.04974	2.41884
A9	4.036	3.98	0.05594	2.78472

- ①総合満足度(A9)と教員の熱意の評価(A6)が高くなっている。ともに有意差が認められる。
- ②事前・事後学習(A3)と学習目標の達成(A4)の評価が低くなっている。いずれも大きな有意差が認められる。
- ③教員に対する評価(A6～A8)は高く、学生自身の自己学習評価(A1～A4)が低くなっている。

表 4-2 法学部の後期授業に関する経年比較

	2011	2010	変動差	統計量
A1	4.191	4.122	0.06874	3.11607
A2	3.848	3.772	0.07647	3.39835
A3	2.865	2.945	-0.0803	2.72336
A4	3.606	3.582	0.02446	1.0956
A5	3.933	3.801	0.13189	6.14868
A6	4.072	3.89	0.18204	8.38391
A7	4.003	3.815	0.1882	7.92397
A8	3.968	3.777	0.19154	7.78504
A9	4.001	3.795	0.20585	8.43656

- ①事前・事後学習(A3)と授業目標の達成評価(A4)を除くすべての項目において評価が高くなっている。いずれもきわめて高い有意差が認められる。
- ②特に、シラバス通りに授業がなされたこと(A5)、教員の熱意(A6)と工夫(A7)など教員に対する評価はかなり高くなっている。いずれも高い有意差が認められる。
- ③授業の出席率(a1)および意欲度(A2)も高くなっている。A5～A9における有意差はかなり高い。

(2) 2011年度前期と後期の比較

表 4-3 経営学部の前期と後期の比較

	後期	前期	変動差	統計量
A1	4.27487	4.3257	-0.0508	3.38515
A2	3.97118	3.87266	0.09852	5.8288
A3	3.00179	3.06031	-0.0585	2.52333
A4	3.66461	3.55221	0.1124	6.41624
A5	3.952	3.80399	0.14801	9.2586
A6	4.11677	3.92408	0.19269	11.4474
A7	3.99722	3.79112	0.2061	11.3486
A8	3.94293	3.733	0.20993	10.8507
A9	4.03627	3.79164	0.24463	13.3313

- ①出席率(A1)と事前・事後の学習(A3)では低く評価され、意欲(A2)と目標達成(A4)は高く評価されている。いずれも大きな有意差が認められる。
- ②シラバス通りの授業(A5)、教員の熱意(A6)、工夫(A7)などは高く評価されている。いずれもきわめて大きな有意差が認められる。
- ③総じて、教員に対する評価は前期と比べて高くなっている。

表 4-4 法学部の前期と後期の比較

	後期	前期	変動差	統計量
A1	4.191	4.29427	-0.1032	5.40884
A2	3.848	3.79418	0.05424	2.73417
A3	2.864	2.80748	0.057	2.18561
A4	3.606	3.4566	0.14968	7.5175
A5	3.933	3.7379	0.1949	10.2161
A6	4.072	3.84615	0.22617	11.0889
A7	4.003	3.73176	0.27165	12.7462
A8	3.968	3.69859	0.26956	12.0304
A9	4.001	3.7578	0.24334	11.1239

- ①出席率の評価(A1)は低くなっている。大きな有意差が認められる。
- ②事前・事後の学習(A3)においても意欲(A2)においても評価は高くなっている。有意な差がある。
- ③学習の到達目標の評価(A4)およびシラバス通りの授業の評価(A5)はかなり高くなっている。有意差はきわめて高い。
- ④総じて、教員評価は高く、また、学生の自己評価も出席率を除くすべての項目で高い。

<考察> 記名による今回の授業アンケート結果と無記名による2つの授業アンケート結果との比較から、2学部における総合満足度は共に上昇し、評定値4に達したことが偶然ではないことを示唆する。特に、法学部における評価値の上昇は顕著である。以前より、後期の評価が前期に比べて高くなることは指摘されてきたが、今回の結果は記名による効果が加わり、さらに評価値が高くなったと思われる。

また、教員に対する評価の向上と学生の自己評価の低下が有意に示されたことは、学生が自分に厳しくし、教員については好意的に評価したとも受け取れる。しかし、このことは、記名による授業アンケートの信頼性が高まったことを意味するものではない。当初の問題は、自由記述欄における無責任な誹謗中傷や悪ふざけによる授業アンケートへの不信感に関わる問題であった。より正しい理解を得るには自由記述欄のコメント内容に改善が見られたかに関わっている。この点は自由記述欄の学生のコメントに関する報告を待つしかない。また、アンケートの質を保証するには、学生における意識変化や態度変容に関する資料を得る必要がある。いずれも今後の課題となろう。

V まとめと課題

以下では今期実施された「学生による授業アンケート」の集計・分析結果から明らかな点をまとめ、過去10年間の結果の推移を示したうえで、今後の課題を記す。

(1) 単純集計結果について

- ①学生の授業への出席について、前期と比較すると出席は若干鈍ったが、出欠席の傾向はほぼ定着してきたと言える。また、「授業への出席」と「授業への意欲的取り組み」の間に相関があるとは言い切れず、出席者のなかには意欲的な学生とそうでない者が混在しており、それが授業の前提条件となっている。
- ②「授業の事前・事後学習課題の遂行」については全体的には低調であるが、一昨年度、昨年度、今年度前期より上向いてきた。ただ、回答の偏差が全質問項目のなかで最も大きく（SD1.19）、事前・事後学習を学生がするかしないかは授業によって大きな差があると考えられる。ここには、提示される課題の具体性や学生にとっての明瞭さ・有意義性、教員の課題点検の厳密さや授業における必須性、学生の課題遂行の真剣味や優先度、学生の能力的・時間的制約、さらには学生の課題達成感など、複数の要因が絡んでこよう。また、「授業への意欲的取り組み」との相関があるということは、意欲が具体的な行動として課題遂行に反映されているものと考えられるが、その相関は決して強くない。これは、意欲は「気持ち」の次元、課題遂行は「行動」の次元として、それぞれ別個に評価する学生の傾向を示唆している。
- ③「シラバスに沿った授業の進行」は、昨年度や今年度前期より「そう思う」の比率が上昇している。しかしⅡ節でも触れたように、あまりシラバスにとらわれすぎると学生にとって有用感の少ない授業となってしまう可能性があることから、必ずしも回答の数値が高いことが望ましいとは言い切れない。むしろシラバスの記述と実際の授業内容との異同が判断できない学生が課題であろう。この点から、「どちらともいえない」の回答を減少させること、加えて各授業における回答の偏差を小さくすることが目標となろう（この項目のSDは0.89で、「授業への出席」の次に小さい）。
- ④「教員の熱意」、「内容を理解させる工夫」、「教員の話し方」の3項目がいずれも「総合満足度」と強い相関がある傾向は、これまで一貫している。

(2) 授業の客観的諸条件の分析結果について

- ①「総合満足度」に焦点づけた諸条件の分析においては、Ⅲ節に図示されているように昨年度と同様の傾向が表れた。授業規模と満足度の関係に関しては若干注意が必要で、大規模授業の多くは記名式アンケートを実施した経営学部と法学部の開講科目だったことからその影響が現れたものと考えられ、それを除けば小規模授業の満足度が高いという傾向はこれまでと変わらない。
- ②各質問項目間の相関についても表示の通りで、前期とほぼ同じ数値となっている。要因間の影響関係についてはこれ以上の新たな発見は難しい。過去FDニュースにおいては授業アンケート結果の報告のたびに、「教員の熱意」、「内容を理解させる工夫」、「教員の話し方」が学生の満足度と「かなり高い相関が見て取れ……この3つの設問が共に学生の満足度を高める要因であろう」（『FD ニュース』No.31）ことが指摘されてきた。今期のアンケート結果からもこのことが確認された。これ以上の新たな知見を得るには、現行のアンケートの設問や分析方法に手を加える必要性が示唆される。

(3) 記名式アンケートの実施結果について

「授業アンケートの信頼度を高め、教員と学生の真摯な関係を形成し共同して授業改善を図る」との目的で、今期、経営学部と法学部の開講科目で記名式授業アンケートが実施された。結果は「変化があった」と言えるもので、授業アンケートのあり方について一石を投じたという意味で、その試みを評価したい。

科目構成がほぼ同じであろう 2010 年度後期との比較によれば、T 検定の数値（統計量）をみると、無記名式であった 2010 年度後期と今期との変動差が多くの項目で有意なものであったことがわかる。断定はできないが無記名から記名への変化がこの有意な変動差を生じさせたと考え、これをアンケートの「記名効果」と呼んでおこう。

「A1」～「A4」は学生の「自己評価」項目、「A6」～「A8」は「教員評価」項目と言ってよいものである。自己評価項目と教員評価項目における変動差の表れ方は、経営学部と法学部とでは似通った面と相違する面とがある。似通った面は、両学部ともに教員評価項目における変動と同程度の有意差をもって「総合満足度」が変動していることである。

他方、相違する面については、経営学部では、4つの自己評価項目のうち「事前・事後学習課題の遂行」と「到達目標の達成」に負の「記名効果」が有意に表れており、教員評価項目は全てに正の「記名効果」が有意に表れた。概して学生自身の自己評価が低くなり、教員に対する評価は高くなったと言える。

それに対し法学部では、4つの自己評価項目のうち「授業への出席」と「授業への意欲的取り組み」には正の、「事前・事後学習課題の遂行」には負の「記名効果」が有意に表れている。また教員評価項目には全て正の「記名効果」が、強く有意に表れた。概して「記名効果」は「事前・事後学習課題の遂行」を除いて学生の自己評価を高めるように作用し、さらにそれより強く有意に教員に対する評価を高めるように働いたと言える。

現時点では、記名することにより授業アンケートの所期の目的が果たされたと言うことはできない。アンケートの信頼性の点については慎重な検討を要する。さしあたり必要なのは、授業の「総合満足度」は年々上昇し、また前期より後期の評価が高い傾向がみられたが、今期の評価値の変動が一昨年における変動と比較してなお有意差があるか否か、また他学部における変動と比較しても有意であるか否かの検証であろう。

また、経営学部と法学部における変動差の表れ方の相違にも注目する必要がある。なぜ異なった形で表れたのだろうか。回答にそれぞれ異なる動機的バイアスが作用した可能性がある。自己評価項目に関しては、さいわい別のデータセットによる裏付けがある程度可能である。例えば「授業への出席」については出席管理システムによるデータが客観的な形で存在する（ここでは出席管理システムのデータの信憑性が問題ではなく、学生自身の出席に関する自己認知、自己管理の問題となる）。このように別のデータセットも活用しながら、授業アンケートの信頼性に対する検証を進めることも課題となろう。

(4) 10年間の結果の推移

ところで、本学において FD 活動の一環として授業アンケートを実施するようになってから 10 年が経過した。FD ニュースに掲載される授業アンケート集計結果報告では毎回、「総合満足度」がこの間どのように推移してきたか報告されている。それによると、平均値 3.8 前後の水準に到達して以降、ほぼ安定的に推移してきたとされる。では、他の質問項目についてはどうなのだろうか。満足度と同様の変化を辿ってきたの

だろうか。以下にそれらを図示してみたい。

過去の授業アンケート集計結果報告をひも解くと、アンケート実施の初期は多くの共通質問項目が設定され、また最初に実施された 2002 年度は前期と後期の間で設問が変更されたりしている（02 年度前期は 12 項目、02 年度後期から 03 年度は 16 項目）。「質問紙調査」として適切な内容の設問を備えようとした「模索期」であったとことがわかる。その後 2004 年度からは、設問の縮約（04・05 年度は 6 項目、06・07 年度は 7 項目。ただし、06 年度と 07 年度では設問が異なる）、実施対象科目の縮減（05・06 年度は各期で半減）など、主として回答者の負担を軽減して実質化を図ろうとした「合理化期」であった。設問・規模がほぼ現行の形になったのは 2008 年度以降であり、「定着期」と呼んでよかろう。

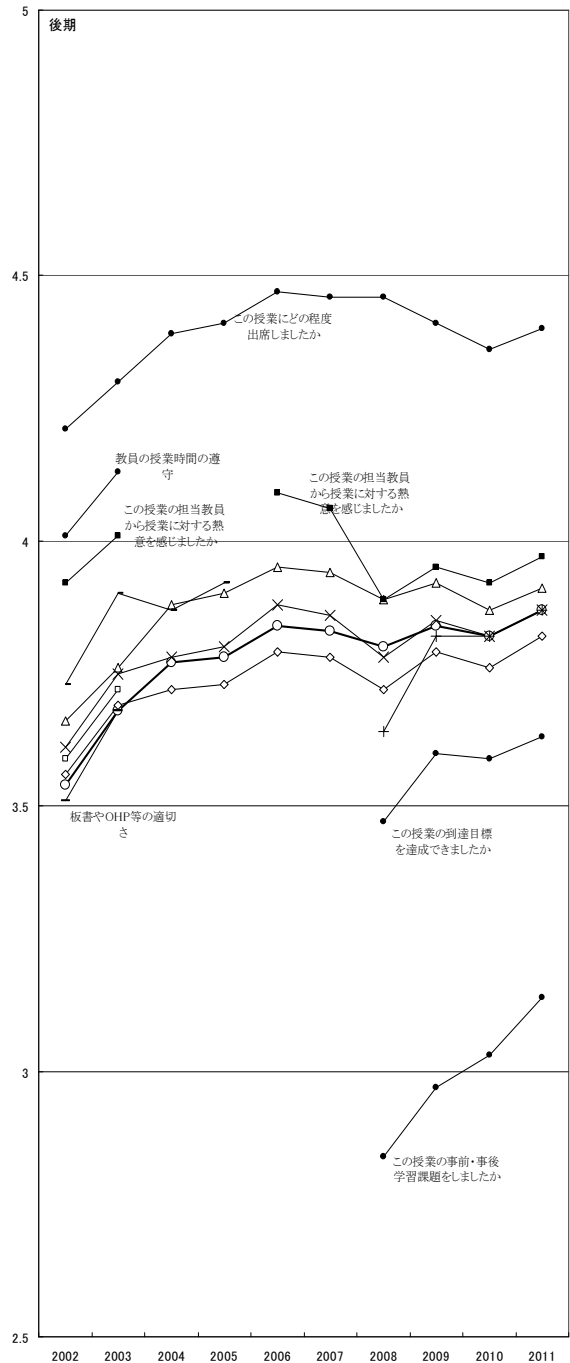
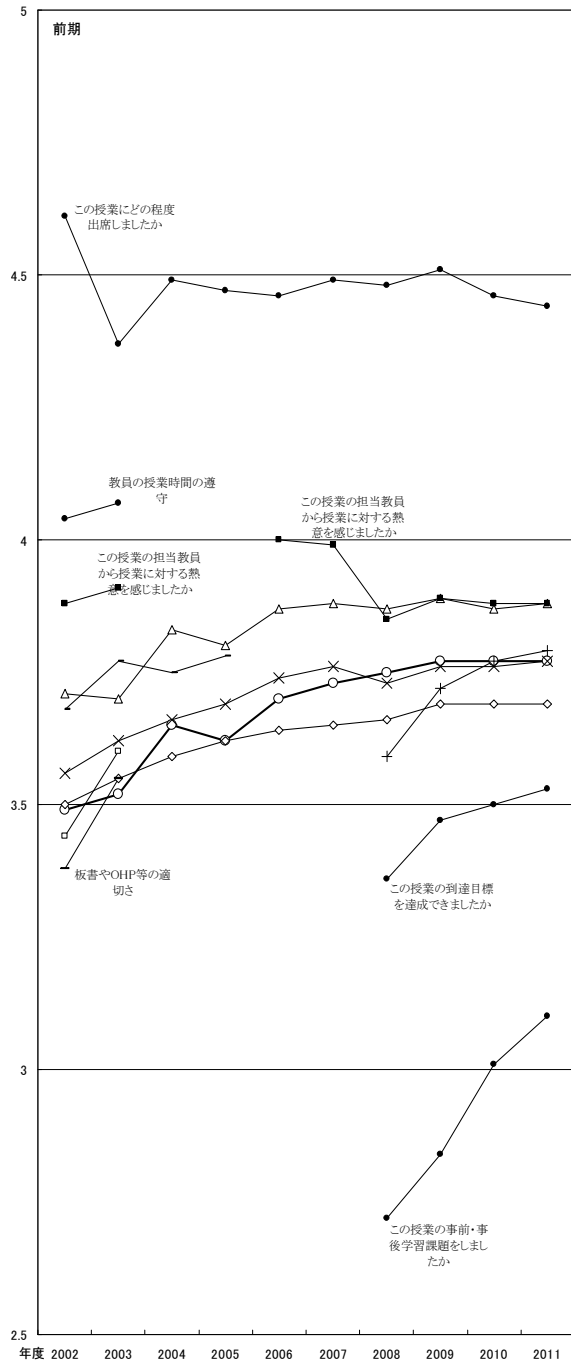
このような経過を辿った 10 年間の授業アンケートにおける各質問項目の集計結果を前・後期別に示したのが図 5-1 である。「模索期」の質問項目は数が多いためにいくつか割愛した。

これを見ると、評価値が「総合満足度」に近い値を示してきたのは「教員の話し方」と「内容を理解させる工夫」であるが、「総合満足度」と相似の変化を辿ってきたのは学生の「授業への意欲的取り組み」である（後期については「教員の話し方」も近い）ように見える。また、「模索期」には「内容を理解させる工夫」の中身を問うかのような設問（「板書や OHP 等の適切さ」、「授業の速度」）がある。後期についてはグラフの傾きが近似していて、これら 2 項目が確かに「工夫」の中身を表しているように見えるが、前期についてはそのような傾向は見られない。同様に、「教員の熱意」と「教員の授業時間の遵守」、「質問や疑問への対応」との関係を見ると、後の二者が「教員の熱意」の中身を表しているのではなさそうだ。

（5）今後の検討課題

学生による授業アンケートの実施 10 年目にあたる今年度は、授業アンケートの活用・実施方法において、自由記述の抽出と教員によるコメントの集約・閲覧、記名式アンケートの導入など新たな試みがなされた。アンケートの自由記述欄には学生からの様々な意見が記されるが、そのなかから科目の担当教員が抽出した記述にコメントを付記したものを各学部 FD 委員等が集約し、各学部等において教員に配布・供覧するなどの活用方法も、組織的な FD 活動として評価されよう。記名式アンケートの導入についてはすでに触れたが、以下、授業アンケートの活用・実施方法も含め少し大局的な観点から、今後の検討課題について記す。

第一に、これは来年度以降 FD 委員会や各学部等で決められることなのであまり強調できないが、記名式アンケートはしばらく継続実施することが望まれる。今年度は経営学部と法学部が先行して試みたが、そのうち他学部等も追随すれば先行実施学部との比較も可能になろう。この 2 学部の今期のアンケート集計結果は、無記名式から移行して変化があったと言えるものであった。このような変化が出ること自体は学生のきわめて正常な反応で、いくつかの質問項目では大きな上昇的变化がみられたが、これは記名式アンケートを継続するうちに落ち着いていくだろうと予想される。つまり、継続するうちに回答に慣れ、評価に習熟していくだろう。記名による責任を負いながら、しかし客観的で冷静な評価ができるようになった時こそ、学生が「共同して授業改善を図る」主体的な受講者・学習者として成熟した、見方を換えれば、授業アンケートの信頼性が高まったと言えるのではないだろうか。



- 総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか
- △— この授業に意欲的に取り組みましたか
- この授業の到達目標を達成できましたか('08～)
- この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか('02～'03, '06～)
- 教員の授業時間の遵守('02～'03)
- ◇— この授業の担当教員の話し方は、明瞭でわかりやすかったですか
- 授業の速度('02～'03)
- この授業にどの程度出席しましたか
- この授業の事前・事後学習課題をしましたか('08～)
- 十— この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか('08～)
- 教員は、学生からの質問や疑問に誠実に答えていた('02～'05)
- ×— この授業の担当教員は、授業内容を理解させるための工夫をしていましたか
- 板書やOHP等の適切さ('02～'03)

図 5-1 授業アンケート各質問項目の 10 年間の推移

現在、「記名式アンケートは答えにくい」という学生は少なくないと思われる。それが上記2学部の記名式アンケート結果における上昇的变化の背景でもあろう。しかし、答えたことが報われる、少なくとも答えた後が見えることが、「答えにくさ」を解消・軽減することになるだろう。そこで第二に、アンケートの自由記述欄の記述を丁寧に扱う必要がある。例えば自由記述に対する教員からのコメント・回答は学生に公開して、教員が真剣に対応している様子が伝わるようにするなどである。記名式アンケートは責任主体が明確である分、教員・学生の双方に相応の応答責任・説明責任を果たすことが求められるようになる。教員と学生の責任ある行動のうえにこそ、「共同して授業改善を図る」コミュニケーションが成り立つのではなかろうか。そのコミュニケーションは最大限、言語シグナル（発話や文言）に依るものでありたい。言語シグナルは意味が明瞭でメッセージがより明確に伝わりやすいのに対し、非言語シグナルは意味が曖昧で憶測や誤解・疑念を生じさせやすい。授業アンケートでいうと自由記述が前者で、評価値は後者であろう。多分に憶測や疑念を含みながら評価値を解釈しようとするより、学生の「声・言葉」である自由記述からメッセージを読み解く方が、よほど生産的だ。それどころか、評価値の偏重は脱コミュニケーション（アンケートに回答すること・アンケートの結果に、大した意味を見出さなくなる）を促進しかねない。自由記述を丁寧に扱うことで、「共同して授業改善を図る」コミュニケーションが活性化させられるのが望ましい。

他方、意味は異なるが「答えにくい」のは記名式ばかりではない。多義的な質問項目、短期間に集中する回答作業などの点は、学生にとっては真っ当には答えにくく、授業アンケートの有効性を低めていると考えられる。このような「答えにくさ」は、紙媒体のアンケート、一定期間内の授業時間を使った回答、全体一律に集計され返される結果という、現行の実施方法に起因する点が少なくない。柔軟性に欠け展開可能性が小さい方法からは、授業改善に有効な新たな知見を導き出すことは難しい。このようにアンケートの有効性を低めている要因について、実施方法も含めて見直しが必要である。これが第三である。

第四に、学生による授業アンケートの目的の再検討が必要である。たしかに現行の授業アンケートも一定の役割を果たしている。アンケートの評価値は、自分が担当する科目の評価が全体のなかでどの辺りに位置づくのかを知らせてくれるし、全体と比較して何が良かったのか・良くなかったのか想像するきっかけを与えてくれる。しかし位置づけだけは知らされて、何が良かったのか・良くなかったのか自分では確証をつかめぬまま、次期の授業でまた暗中模索することを強いるものでもある。授業アンケートのねらいとしてどこに照準を合わせるかは、様々な局面で常に問題にされるところだ。例えば記名式導入の是非など、アンケートの活用・実施方法をめぐる意思決定においては必ずこれが問題になる。顧みれば、今年度の新たな試みである自由記述の活用は、評価値のような抽象的なものだけではなく、具体的な意見を参考にしようという動きであった。つまり授業の改善に向かう、より確からしい立脚点を求めようとするものである。10年を経過して授業アンケートも成熟期に入ろうとするならば、その目的の検討と再定義は避けて通ることができない課題である。

「スポーツ実習」のアンケート実施結果の報告

スポーツ振興センター 藤林真美

スポーツ振興センターでは、「スポーツ科学実習Ⅰ・Ⅱ」「生涯スポーツ実習」の授業改善を目的として、2011年度後期に授業アンケートを行いました。

【方 法】

対 象：「スポーツ科学実習Ⅰ・Ⅱ」および「生涯スポーツ実習」に登録、継続して履修し、下記のアンケート実施日に出席した学生。

実施期間：2011年12月9日（金）～22日（木）

方 法：【結果】に記すアンケート項目に対して、マークシート用紙を用いて回答させた。回答は無記名で行い、成績評価には一切関係しない事を文書と口頭にて説明した。

【結 果】

すべてのアンケート回収数は1,147であった。

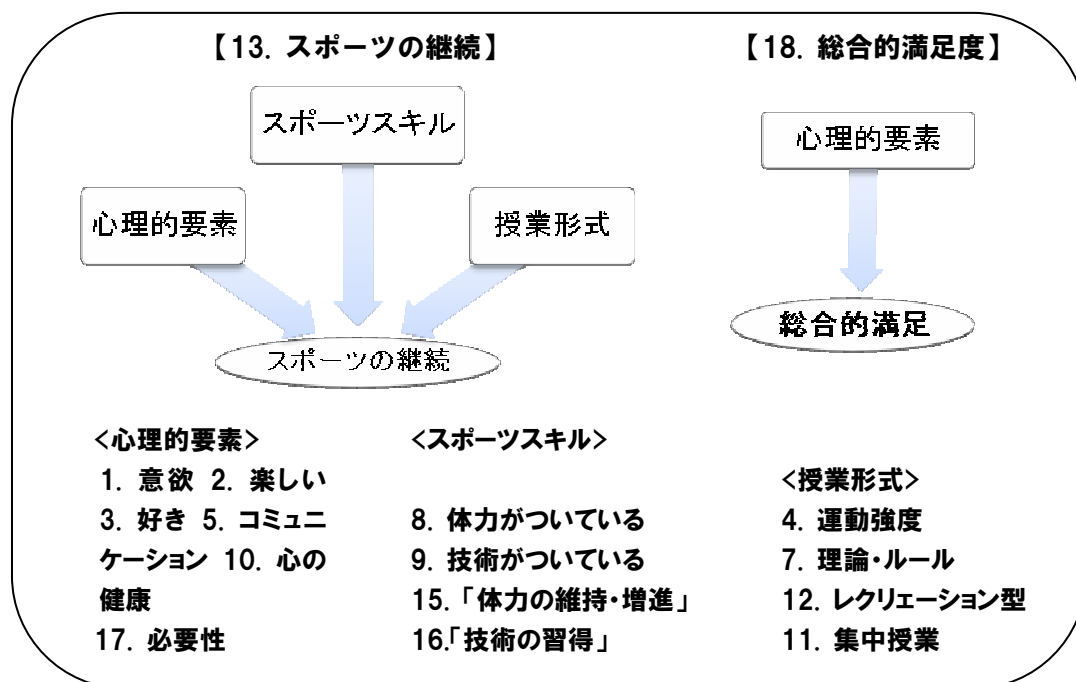
- ① 1～18の質問の平均値、標準偏差、および18.総合的満足度との Pearson の相関係数(r)を下表に示す。

	質 問	平均	標準 偏差	18との 相関
1	この授業に意欲的に取り組んでいますか。	4.28	1.13	0.643
2	この授業は楽しいですか。	4.16	1.13	0.745
3	この授業を好きですか。	4.11	1.13	0.727
4	運動強度はどうか(A:きつい ~ E:楽である)。	3.71	1.14	0.264
5	この授業で、学生同士のコミュニケーションはとれていますか。	3.97	1.10	0.549
6	授業の用具は充実していますか。	3.80	1.12	0.442
7	授業の中で、その種目に関する理論・ルールについて講義があると思いますか。	2.89	1.34	0.141
8	この授業を受けて、体力がついていると思いますか。	3.10	1.25	0.339
9	この授業を受けて、技術が身についていますか。	3.44	1.17	0.457
10	この授業を受けて、心の健康によいと思いますか。	3.87	1.09	0.648
11	集中授業(数日間で一気に授業:スポーツ実習を行い、単位を取る形式の授業)があれば、受けていただけますか。	3.55	1.39	0.374
12	レクリエーション型の授業(例:ハイキング・ウォーキングなど)があれば、受講したいですか。	2.90	1.41	0.228
13	今後、自分自身で何かスポーツ活動を始めたり続けたりしようと思いますか。	3.62	1.21	0.443
14	この授業履修の目標として「単位取得」に重きを置いていますか。	3.88	1.18	0.313
15	この授業履修の目標として「体力の維持・増進」に重きを置いていますか。	3.67	1.16	0.507
16	この授業履修の目標として「技術の習得」に重きを置いていますか。	3.45	1.18	0.456
17	大学の授業で、スポーツ実習は必要だと思いますか。	4.05	1.11	0.740
18	総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか。	4.26	1.03	

- ② スポーツ実習は「総合的満足度」に加え、大学におけるスポーツ実習の経験を“生涯スポーツ”に発展させたいという目標をもつ。このため18の質問項目のうち13.「スポーツの継続」および18.「総合的満足度」について、それぞれにどんな項目が影響しているのか、因子分析*

を用いて探究した。

*因子分析：測定された多数の変数の相関関係に基づいて、共通する因子を抽出する手法。



【まとめと考察】

まず 1. 「意欲的な取り組み」 2. 「楽しい」 3. 「好き」 18. 「総合的満足度」の平均値が比較的高値を示した結果から、本学のスポーツ実習に登録・受講している学生は、この授業に能動的に取り組み、全体的に満足している傾向がうかがえた。またスポーツの基本要素である心技体のなかで、心の健康への影響度が高かった。この結果は、スポーツ心理学系の多くの先行研究より明らかになっている“身体運動の抑うつ・不安軽減効果”を支持するとともに、スポーツ実習の受講によって心の健康を維持・増進できる可能性を示唆する。昨今メンタルヘルスの維持・増進は社会的にも重要課題となっており、今後より多くの学生のスポーツ実習履修が望まれる。

さらに②の因子分析結果から、「授業満足度」を向上させるためには、授業に対する「意欲」や「他の学生とのコミュニケーション」といった心理的要因を満足させる工夫が必要であることが分かった。さらにスポーツ実習は、学生の在学中のみならず卒業後も、健康を維持・増進させるため“生涯スポーツ”につなげたいという目標をもつ。そのためには心理的要因のみならず、技術の取得や理論・ルールの説明、さらに集中授業やレクリエーション型授業の実施など、多くのスポーツ種目を経験させる工夫も必要であることが明らかとなった。

今回試験的にスポーツ実習に対する授業アンケートを行った結果、今後の授業改善のため多くの示唆に富むデータを得ることができました。本学の建学の精神である“真のフィールドスペシャリスト”を育成するために、教養の基盤として、より充実したスポーツ実習を継続することが本科目の責務であると思われます。スポーツ振興センターでは学生・社会のニーズに応えるべく、今後もこのような授業アンケートを実施し、さらなる授業改善を行っていきたいと考えています。

理工学部FD委員会は、新たな時代の教育システムの創成を目指して学生が主体となる学びのあり方を追求するため、2011年度においても種々のFD活動を実施した。主な活動は、1) 摂南大学理工学部ワークショップ(8月29(月)、30(火)および2011年9月12(月)、13(火))、2) 授業見学(前期2011年6月1(金)~30(土)および後期2011年10月31(月)~11月26(土))、3) 理工学部FDフォーラム(2012年3月12(月))である。これらの活動を実施するに当たり、月に約1回の割合で理工学部FD委員会を開催し議論した。以下これらの活動の概要を述べる。

1. 摂南大学理工学部ワークショップ

昨年8月に大宮の60周年記念館において理工学部ワークショップが開催された。初めての試みでもあり、教員の教育に対する意識の共有、親睦を通じコミュニケーションの促進を図ることを第一の目的に掲げられた。今年度は理工学部の全教職員が同じワークショップの経験を共有するために、2回実施されることになった。ワークショップを実施するにあたって重要であるタスクホースは昨年務めて頂いた先生に加え、昨年のワークショップ参加者からも人選した人も含め理工学部FD委員会の7名の委員も加わり対応した。ワークショップの準備は、昨年同様にタスクホースと理工学部FD委員が参加した事前打ち合わせで周到に行われた。今年度第1、2回理工学部ワークショップは、2011年8月29(月)、30(火)および9月12(月)、13(火)に大宮の60周年記念館において参加者宿泊を条件で開催された。

ワークショップ参加者は第1回目15名、2回目12名で実施された。ワークショップの課題は昨年と同様に身近な問題である「授業改善」をテーマに実施した。最初の「理工学部の授業に係わる課題」では、問題点を徹底的に抽出し、その内容をKJ法によってグルーピングし現状解析が行われた。次に、「授業に係わる課題」を二次元展開法により優先順位を決め、優先課題に対して考えられる「授業の改善方策」をまとめ列挙する作業が行われた。最後に、「最優先課題」について、詳細な授業改善策などの取り組み方などのアクションプランをまとめ提案する形でワークショップは進められた。各課題「理工学部の授業に係わる課題」、「授業の改善方策」および「最優先課題のアクションプラン提案」における各グループの発表においては活発な討議がなされた。

このワークショップは、午後から開始し、その夜は泊まり込み意見交換会、懇親会を実施したことで学科を超えた交流・親睦が深まるとともに、教育における問題意識や情報を共有することができ有意義な活動となった。なお、理工学部ワークショップ報告書は、参加者の皆様から提出していただいた各課題のまとめと感想、ワークショップの概要と感想などを中心にまとめたもので、参加者、タスクホースなどのメンバーに配布された。

2. 授業見学

「授業見学」は、前期2011年6月1(金)~30(土)および後期10月31(月)~11月26(土)に実施された。「授業見学」は、昨年と同様の趣旨で行われた。①参加することに重点をおいた授業見学、②相乗効果を期待して学科を超え、できるだけ多くの授業を見学可能にする。③見学記録シートは、学生の様子(出席数、学生の態度、積極性など)のメモを中心とし、見学者の感想などとともに授業担当者にフィードバックし、授業改善に役立てていただく。などである。今回の授業見学の対象は、理工学部専任教員、非常勤教員の担当する理工学部開講科目すべてとし、また対象科目は、講義、演習、実験、

実習科目とした。この「授業見学」に参加しやすくするため、理工学部の全ての学科の曜日別時間割を教員全員に配信し、さらに、見学の要領として、授業見学の時間は10分程度でも可とし、全ての教員ができる限り多くの授業に見学可能なように期間を1カ月とした。「授業見学」の実施結果は、前期が見学総数346件（記録シート枚数）、後期は170件であった。

3. 授業アンケートの「自由記述欄のコメントに対する改善案」

前期授業アンケートの自由記述欄の改善案・回答に関して各学科のFD委員通じ回収した。これを授業科目名、授業担当者を記述しない形で、各学科の集計をさらに「設備」、「授業環境」および「授業や試験の方法」に関するコメントにまとめ直した自由記述欄の内容に対する改善案・回答を理工学部全教員に配信した。

後期の授業アンケートの自由記述欄に対する回答は、授業アンケートの自由記述欄に対するコメントのWeb公開による方法で実施した。

4. 理工学部FDフォーラム

理工学部FDフォーラムは、3月12日（月）にプチテアトルにおいて開催された。教育貢献表彰および今年度の理工学部におけるFD活動を報告するとともに、学部教育にとどまらず大学院教育を含めた教育システムを考える機会とした。講演は1時間で、課題「高度な学際融合教育を目指して」で大阪大学学際融合教育研究センター長・大学院工学研究科教授の久保司郎先生に御講演いただいた。

外国語学部FD活動報告

外国語学部 浦野崇央

外国語学部が2011年度に行った主なFD活動は、次の通りである。

2011年7月12日(火) 16:40~18:10

2011年度第1回FDフォーラム「初年次ゼミナールの果たす役割—テキスト『First Year Study Guide2011』の内容検討を通して—」の開催

2011年7月13日(水)~8月2日(火)

「学生による授業アンケート」(前期)自由記述欄の取りまとめと結果の報告

2011年8月4日(木)~8月31日(水)

「FD活動アンケート」の実施と集計結果の報告

2011年11月14日(月)~11月25日(金)

「授業公開・見学」の実施

2012年1月17日(火)~2月20日(月)

「学生による授業アンケート」(後期)自由記述欄の取りまとめと結果の報告

2012年3月12日(月) 13:20~14:50

2011年度第2回FDフォーラム「教職員ワークショップの課題と今後の展望」の開催

以上のうち、「第1回FDフォーラム」の詳細については、すでに『FD NEWS』No.32

にて述べさせていただいたので、今回は8月に実施した「FD活動アンケート」について報告したい。

「FD活動アンケート」は、「学生による授業アンケートを記名にすべきか否か」「授業公開のありよう」の二点について、外国語学部の全専任教員に対して実施した。今回のアンケート実施の目的は、後期の授業アンケートおよび公開授業の実施方法にかんする意見を集約することであり、集計結果は以下のとおりとなった。

回答者：24名

①授業アンケートを記名式にするべきだと思いますか？

無記名にするべきだと思う：13

記名式にするべきだと思う：6

どちらでもよい：5

②授業公開をどのような方法で実施すべきだと思いますか？

公開する側、見学する側ともに希望者のみ：16

全授業を公開し、全教員に見学を義務づける：0

その他：8

まず、授業アンケートの記名・無記名にかんしては、外国語学部の現行のやり方である「無記名とすべき」が半数以上を占めた。その理由として、「記名式にすると回収率が低くなるのではないか」といった危惧や「学生に対して義務的に行っている以上無記名にすべきだ」といった意見が挙げられた。一方、記名式を望む声は、「学生に責任をもたせるために必要である」といった意見や「学生に対するレスポンスの必要性」を訴えたものがあった。なお、他の自由意見として、アンケートをwebで行ったり、用紙の回収を事務職員が行うなどの方法についての提案やアンケートのより早い時期の実施についての要望があった。

次に、授業公開についてだが、回答者のほとんどが「公開・見学ともに希望者のみ」（外国語学部現行の方法）を望んでいた。「その他」については、「公開」の義務付けを求める声がほとんどである一方、「見学」の義務付けについては形骸化を危惧し、反対する意見が多かった。

以上の結果を踏まえ、外国語学部では後期の「授業公開・見学」の実施に際して希望者を募り、計10科目の公開・見学を実施した。なお、授業の見学報告についてはFD委員会としては直接的には関与せず、公開者と見学者双方がそれぞれ個別に行った。

ちなみに、外国語学部では3月12日(月)に第2回FDフォーラムを実施した。テーマは、「教職員ワークショップの課題と今後の展望」である。「教職員ワークショップ」は学長方針において一層の充実が謳われているところであるが、三年目を迎え、いくつかの課題が浮かび上がってきている。そこで、より有意義な「教職員ワークショップ」のありようについて、2011年度参加者の体験報告を踏まえつつ検討した。

経営学部FD活動報告

経営学部 福田市朗

経営学部の2011年度のFD活動は次の4つの活動からなる。

- (1) 記名式授業アンケートの試験的導入
- (2) 授業アンケートにおける自由記述欄のコメントと回答
- (3) 授業見学の実施
- (4) 学部FDフォーラムの開催

以上の4つについて、簡単に説明することで今年度の本学部におけるFD活動の報告としたい。

(1) 記名式アンケートの試験的導入

これまで実施してきた無記名によるアンケートのもたらした問題点として、アンケートの記載内容に教員に対する誹謗中傷や悪ふざけがあり、教員の間には授業アンケートに対する不信感が生まれてきた。また、マンネリ化してきた授業アンケートに対する新たな試みを求める声もあり、記名による授業アンケート導入を昨年度より学部FD委員会で議論し、昨秋合意を得て、全学FD委員会に無記名との併用をお願いすることになった。

記名によるアンケートは、自由記述欄のコメントから誹謗中傷や悪ふざけをなくしたいという目的もあるが、学生自身が真剣に回答し、授業の改善そのものに学生自身が主体的に関わる機会を与えるという目的も含まれている。もちろん、記名によって自由な発言が抑止されたり、あるいは追従がありうるなどの問題も考えられる。しかし、そうした問題も無記名のアンケートとの比較検証によって明らかとなる。結果は数値データに関する分析と言語データの分析という2つの分析を通して考察される。現時点で入手した数値データによれば、教員評価は高く、学生の自己評価は低くなっている。なお、言語データは現在回収中であり、別の機会に報告する。

(2) 自由記述欄のコメントと回答

アンケートに記載されたコメントについては、これまで各教員が自らの責任において対処することとなっていたが、前期授業アンケートに関しては、学部FD委員会で回収・分類し、学部教員間で共有することとなった。寄せられたコメントの総数は103件に及び、授業科目数は22科目、教員数は14名に上る。予想以上の回収であり、教員の間で授業内容が相互に理解できたことの成果は大きい。これらのコメントと回答は学部教員に冊子として配布され、非常勤の先生方にも閲覧可能とした。また、全学FD委員会での閲覧も可能とした。

(3) 授業見学の実施 (2011年11月14日～11月26日)

授業見学の期間が2週間という短期間であったが、授業を参観された教員数は経営学科の教員数13名、経営情報学科の教員数9名で、総数22名に上った。参観された授業コマ数は32コマ、教員より寄せられたコメントの数は12件であった。その内容は、教員の授業における創意工夫あるいは板書の再評価、レジメ作成の要領の良さなど授業改善に向けた教員の努力に対するコメントのほか、授業中の学生の私語に対する防止法などについて教員間で話し合いたいなどの意見が見られた。授業に対する工夫や意見が学部教員間で共有されたことの意義は大きい。

(4) 学部FDフォーラムの開催

2011年度の学部FDフォーラムは2012年3月14日に開催した。本フォーラムは学部キャリア支援の先生方の協力を得て、「卒業生からみた経営（経営情報）学部の教育（仮）」というタイトルのもとで開催した。本学部学生のキャリアに対する意識調査と卒業し仕事についている先輩に対する調査をもとに、本学部の学部教育のあり方を教員・学生・卒業生の3者を交えて議論した。就職難と言われている今日、学生の意識変革や態度変化は就活には欠かせない。キャリア教育に対して如何なる学部教育が可能かについて議論することは重要な課題であり、FDフォーラムの成果が期待される。

全体として、2011年度の経営学部のFD活動は活発に行われたと思う。試験的導入とは言え、記名式アンケートを実施し、その結果を得たことの意義は大きい。授業アンケートの活用法を考えるための一石を投じたといえる。また、自由記述欄のコメントとその回答を教員間で共有し、授業に関する相互理解が深まったこと、さらに、授業見学を通して授業の工夫と改善点が明らかになったことも有意義であったと思う。次年度は、こうした成果を踏まえて、学部FD活動がより一層活発になることを期待したい。

薬学部FD活動報告

薬学部 藤森廣幸

薬学部では、本年度4回の学部FD委員会を開催した。まず、第1回目の委員会で2011年度の実施予定項目について検討した。ここでは、1) 薬学部FDフォーラム(全体会議)、2) 「学生による授業アンケート」、3) 授業公開について、概略を紹介する。

1) 薬学部FDフォーラムについて

I) 第1回薬学部FDフォーラム(全体会議)は4月4日(月)に開催された。内容は、1) 2011年度学部運営について、2) 新採用者の紹介、3) 「薬剤師になるために」の協力依頼について、4) 共用試験について、5) 国家試験対策について、6) 実務実習について、7) 薬品の管理徹底について、8) 旅費規程の改正について、9) 実務実習の旅費精算について、10) 東北地方太平洋沖地震の義援金募集についてであった。

II) 第2回薬学部FDフォーラム(実務実習研修会)は4月9日(土)に開催された。内容は、1) 実務実習学生指導担当教員実施マニュアルについて、2) 実務実習記録について、3) その他について。

薬学部では、1年次生には、「薬剤師になるために」の早期体験学習での学生と教員の打合わせ、病院・調剤薬局への引率、レポートの内容指導および小グループ討論の演習がある。4年次生には、共用試験「CBT、OBCE(客観的臨床能力試験)」対策と実施が控えている。5年次生には、病院・調剤薬局での長期実務実習があり、それに関する施設訪問が必要である。6年次生には、薬学部6年制になり初めての薬剤師国家試験が控えている。これらの実習・演習等を円滑に実施するためには、薬学部の全教職員の献身的な協力が必要となる。従って、上述のフォーラムでは薬学部長、教務委員長、実務実習委員長、各担当教職員および事務室長が、概略説明・質疑応答し、新任を含む全教職員の研修を行った。新学期早々2回のフォーラムを実施したので、FD委員会としては、新たなフォーラムを計画しなかった。

2) 「学生による授業アンケート」のコメントの有効利用について

本アンケートの自由記述欄に書かれたコメントを教員相互の授業改善に有効利用することを目的として、薬学部では2009年度よりコメント・改善案集を作成してきた。本年度は質問項目を以下の(a)から(e)に増やして、前期および後期授業アンケート（現在、コメントを分類中）後に改善案の提出を依頼した。ここに前期授業アンケート結果を紹介する。改善案等は薬学部専任教員25名、非常勤講師（事前に協力依頼のアンケートを実施しご賛同を頂いた先生方）4名から提出された（感謝！）。

質問項目 (a) : 「この授業の改善してもらいたい点」に書かれたコメントと改善案に関して、I) 板書について（合計23件の改善案が提出された）、II) 声・話し方・授業の速度（42件）、III) 方法（テスト、演習、挙手、座席指定等）について（26件）および内容（難易度、範囲、詳細さ、解説内容等）について（28件）IV) 配付プリント、パワーポイント、eラーニング、i-navi、教材フォルダ等について（32件）が提出された。項目

(b) : 「この授業の満足できた点」に書かれたコメントと感想（本年度新たなる質問項目）に関して、I) 1.説明がわかりやすい、2.話が聞き取りやすい、3.板書が丁寧・きれい・わかりやすい、4.講義の進行ペースが良い、5.質問への対応が良い等について（43件）、II) 中間テストが良かった・小テストが良かった、学生参加型授業が良かった、レポート、予習、課題が良かった等の方法について（23件）、III) 内容が良かった（1.興味がわいた・面白かった、2.専門知識や、新たなる考え方を身につけることができた（24件）、IV) プリント・パワーポイントが良かった等（25件）に感想が寄せられた。項目 (c) : 「2010年度の改善案をもとに、本年度行った授業改善の試み」に関して、概ね成功例が述べられていることから、本アンケートは教育資質向上の一助になっていると思われる。しかし、改善が必ずしも学力の向上につながらず、逆に学生達の考える力を損なうのではないかと危惧する意見もあった。項目 (d) : 開講中に会ったハプニングや驚かされた学生の発言・質問・行動等（新たな質問項目）では、学生達の基礎学力やモラルの低下に起因すると思われるコメントが得られた。項目 (e) : 「所感」では、本アンケートを通して分かった学生達の意見に対する総評と、本アンケートの意義や実施方法に関する意見が寄せられた。

3) 授業公開について

薬学部の全講義を対象として、10月24日（月）から11月4日（金）に実施した。公開に先立ち各教員が授業を参観された場合、感想文の提出のみを依頼し、その他の方策は教員の自由意志に任せた。委員長は、メールで送付された感想文を科目別にまとめた後、分別された感想文集を科目担当教員のみメールにて配信した。後期専門科目30のうち24科目に対して延べ48件、20名の教員に感想文が寄せられた。感想文には、多くの良い点が指摘され、概ねPNP形式の感想が目立った。他の教員の講義方法や受講学生の聴講態度（着席の位置、後部学生の所作等）を指摘することにより、薬学部生にとってより良い教授法のヒントを得たのではなかろうか。多くの教員は、国家試験対策あるいは研究マインド養成も念頭に置き講義を工夫されていた。

次年度は、上述した薬学部FD活動をさらに改善・発展できることを期待したい。

本年度の法学部FD委員会は6回開催され、主要議題として、授業アンケートの実施方法、学部FDフォーラムの内容、授業公開の方法などについて審議した。

授業アンケートの実施方法については教員のアンケートを行い、その結果多数の支持があった記名式で行うことになり、本年後期の授業アンケートは経営学部とともにこの方式で実施された。アンケート結果が前年までとどう異なるかは、本号掲載の分析を参照されたい。

次に法学部のFDフォーラムであるが、これは12月1日(木)に「ディベートをいかに授業にとりこむか—学生による実演—」をテーマに掲げ、7号館の模擬法廷で行われた。このフォーラムは、三成ゼミ・梅沢ゼミのゼミ生諸君の協力によって実現に至ったものであり、前段階において合同ゼミでの模擬ディベートや学生による自主的な準備があったと聞いている。今回の企画は、学生諸君の積極的な協力無くしては実現出来なかったものであり、参加協力してくれた諸君にはこの場を借りて深甚の感謝を申し上げる。

当日は、まず三成教授より、このフォーラムの趣旨説明があり、ディベート成功のためとして、①論拠の組み立て、②審査員への説得性、③あらゆる角度からの反論による主張の妥当性の検証をポイントとして挙げ、論拠を組み立てるには「準備と根拠」が必要であり、事前の資料収集が決めてであることが強調された。また、ディベート授業の実践的目的として、就活時の面接対策、ゲーム感覚の議論による楽しいゼミとすること、人前で話すことに慣れること、コメント力・質問力の向上を述べられた。その後、「ディベートの40分モデル」の紹介があり、肯定側・否定側それぞれ立論3分、作戦タイム5分、その後それぞれ反論(1)3分、反論(2)3分があり、その後に再び作戦タイム5分、最後にそれぞれが結論として3分を陳述するというものであった。今回のディベートもこのような方式で実行された。

ディベートのテーマは2つあり、第1のテーマは「安楽死の是非」であり、肯定側は三成ゼミ(4名)、否定側は梅沢ゼミ(4名)であった。また、第2のテーマは「性犯罪者情報公開法導入の是非」であり、肯定側は梅沢ゼミ(4名)、否定側は三成ゼミ(4名)にわかれて、熱のこもった議論が展開された。なお、審判として教員2名、学生3名があたり、それぞれの主張の論評と判定にあたった。安楽死肯定論では、全面肯定論ではなく条件付き肯定論であり、その意味では結局のところ否定論を認めざるをえず、その部分否定に過ぎないのではないかと思ったり(ただし勝ったのは肯定論側であった)、反論する際に、緊張したためか、あるいは下調べの不十分さ故か、しばらく言葉に詰まる場面があったりと、未熟なところも見られないではなかった。しかし、全体としては、下調べをしっかりとっており、論点整理ができている学生は自信をもって堂々と発言しており、ディベートの効果を十分認識することができた。

ディベート終了後、見学した教員、参加者をまじえた意見交換が行われたが、そこではディベートの準備の仕方に関する質問、学生に対するアドバイス、本日のディベートの講評など、率直な意見がかわされた。今後、今回のディベートを参考に他ゼミにおいてもディベートを実施することがあれば幸いである。ともあれ今回のFDフォーラムは、授業の工夫・向上のために学生と教員が一致協力する良い先例となったのではないかと思う。

最後に、12月に行われた授業公開についても報告する。法学部では、今年も従来と同様に、すべての教員の授業を最低1科目公開すること、全員に授業の参観をお願いすることにし、その後に「見学報告書」を出してもらった。「見学報告書」は、これも例年と同じく、自分の授業にとって参考になる点や、良いと感じた点を書くよう依頼した。以下、主

な感想を紹介しよう。

- ・「分量は多いが整理され、わかりやすい資料を使っていた」「声量も発音も適切なレヴェルが保たれていた」
- ・当日のテーマ、特に〇〇関係に即して、PDFファイルを使い、わかりやすく講義がなされていたように思う」「質疑応答の機会が設けられ、学生の目線にそった授業展開がなされていたように思う」
- ・「聞き取りやすい声で、ポイントとなる箇所をしっかりと説明していた」「板書の量も多すぎず、適切だと思いました」
- ・「丁寧に一言一言話されていて、聞き易い講義であった」「具体的事例を手がかりとして、講義のテーマについて話を展開されており、学生としては興味を持ちやすいように思われた」
- ・「パワーポイントを穴埋め形式にすることで、学生に授業に集中させる努力が感じられた」「声は大きく明瞭で聞きやすかった」「講義内容に関連した映像を探してきて流すなど、学生が興味深く受講できる工夫が見られた」
- ・「板書がきれいになされており、説明のときの発音が明瞭で、受けやすい授業であった」

経済学部FD活動報告

経済学部 田中幹大

2011年度の経済学部FD活動は、全学のFD活動と連携しつつ、学部独自のFD活動として経済学部教員による学部専門科目の相互授業参観、学生FDミーティング、FD会議などを実施しました。

1. 経済学部専任教員による学部専門科目の相互授業参観

前・後期で全学的に行われた「学生による授業アンケート」の実施期間と並行して、専任教員によって学部専門科目の相互授業参観を行いました。これは昨年度から取り組んでいるもので、摂南大学経済学部生の特徴を把握し、それに対応した授業を実施できるように、参観者・被参観者が互いに工夫している点を学びあい、授業改善のためのアイデアを出し合うという趣旨で実施しています。

経済学部教員は実施期間中、専門科目への参観を自由に行えますが、特に参観者がいない科目が発生しないようにするため、あらかじめ学部FD委員会から参観者の最低限の割り振りも行なって実施しました。また、参観者には、学部FD委員会で用意した「記入シート」に授業の特徴、工夫点等を書き込んでもらい、それをもとに授業終了後、参観者・被参観者で授業改善のための議論を行ってもらいました。特に今年度は学部開設2年目で新たに着任した教員に、1年目から着任している教員の科目を優先して参観してもらい、摂大経済学部生にどのように工夫して授業を行っていくかを相互に議論しました。

2. 学生FDミーティング

2012年2月7日に経済学部2年生11名と教職員4名とで学生生活全般に関するフリーディスカッションを行いました。学生たちが日ごろ何を感じ、考えているのか、「学生による授業アンケート」では見えてこない意見を聞くという趣旨で実施しました。ミーティング

では、はじめにアンケートを実施し、その内容に沿って授業、ゼミ、その他学生生活全般で日ごろ学生が感じていること、また教職員が考えていることを自由に話し合いました。

学生たちからはさまざまに意見が出され、活発な話し合いとなりました。日ごろ不満に感じていることも学生たちからは聞かれましたが、そうした意見のなかには、教員の考えている狙いや真意がうまく学生たちに伝わっていないことによって生じているのもあり、教員側が説明すると学生も納得し、誤解が解消されることもありました。学生、教職員間のコミュニケーションの重要性をあらためて認識させられ、有意義なものでした。



学生FDミーティングの風景

3. FD会議

授業改善、あるいはそれに関わる問題点等を議論するため、経済学部専任教員によるFD会議を実施しました（前期・後期それぞれで実施、後期は3月実施）。前期の会議では全学で実施された「学生による授業アンケート」の分析結果に関する議論、アンケート自由記述欄に対する教員のコメントの回覧と議論、相互授業参観に関しての全体での議論などを行いました。後期のFD会議では、さらに上記の学生FDミーティングに関する議論、『ベースボールエコノミクス』（本学とオリックス・バファローズとの教育に関する連携協定に基づき実施される正課）の報告なども含めて行いました。また、前期は経済学部内での会議でしたが、後期は学内に公開し、さまざまな意見をもらう場となりました。

編集後記

FD ニュース 33号をお届けする。今号は、2011年度後期授業アンケートの分析と、各学部のFD活動報告が主要な内容であるが、28頁の大部になった。頁が増えたのは、今回経営・法の2学部で記名式アンケートを実施したことにより、その分析が新たに加わったこと、またスポーツ振興センターが初めて実施したスポーツ実習のアンケート結果が掲載されたことによるものである。また、各学部のFD活動報告もこれまでより、やや長めに書いていただいた。各学部独自の取り組みが増え、学部FD活動も充実してきている様子がうかがえる。

今回新たに登場した数字や分析、あるいは他学部の状況は、読者諸氏が自分なりに読み解いて、今後の学部FD活動の参考としていただけたらと思う。